

新構想による看護プログラム展開で身体機能・意識状態に変化を起こした症例

宇佐見 希子¹、紙屋 克子²、石山 光枝³、兼松 由香里⁴、篠田 淳⁵

¹社会医療法人 厚生会 木沢記念病院、²静岡県立大学 大学院看護学研究科 教授、

³社会医療法人 厚生会 木沢記念病院 中部療護センター 看護部長、

⁴社会医療法人 厚生会 木沢記念病院 中部療護センター 看護師長、

⁵社会医療法人 厚生会 木沢記念病院 中部療護センター センター長

【はじめに】遷延性意識障害患者の多くは廃用性障害や筋緊張を抱えている。患者の意思表出や生活行動回復は身体拘縮や筋緊張の改善が必要であると考え、新しい構想に基づく看護プログラムを3症例に展開した結果、意識障害の看護方法について新たな示唆が得られた。【方法】予備研究として、当施設において必要な調査項目が得られた2005年～2010年に退院した遷延性意識障害患者38人を対象に基本属性、NASVAスコア、看護展開から患者の変化を調査・分析した。この結果もふまえ、関節拘縮改善のための用手微振動、日常生活の基本となる座位姿勢、経口摂取などの患者が獲得すべき生活象を具体的にイメージした4週間を1クールとした看護プログラムを展開した。【結果】予備研究から、対象患者の多くは意識障害の長期化と共に廃用性障害を抱え、特に重症度の高い患者ほど生活上の問題が見過ごされる傾向にあった。症例は男性2人、女性1人、全員20代で、受傷から介入までの期間は最短1年、最長7年9ヶ月が経過していた。全員の筋緊張と関節可動域が改善し、座位姿勢が確立した。さらに経口摂取が回復・改善し、2人は生活行動に参加できるようになった。意思表示と反応の変化は、右手指でのサイン確立が1人、開眼・笑顔の増加が2人であった。患者の家族からも「可能性がみえた」「事故前の顔に戻った」などの発言があった。【考察】関節拘縮や筋緊張から身体を解放し身体機能を整えることは、患者の表現手段の選択肢と他者との相互コミュニケーションを広げることになり、結果として意識状態を始めとする生活状況の改善にもつながったのではないかと考えられた。